

清高ミニタイムス

北海道清水高等学校
新聞局
北海道上川郡清水町
北2条西2丁目2
発行責任者
横井 心樹

祝200回記念号 25年の軌跡



過去25年の発行物が3階西側の教室に眠る

清水高校新聞局発行の「清高ミニタイムス」が、今回で200号を迎えた。今年度は5月12日(月)発行の第197号から数えて4号目となる。

25年間にわたる発行の歩みは、生徒たちの情熱と顧問や地域の

支えによって築かれてきた。200号を記念し、歴代の新聞局顧問の先生方に当時の指導の様子や思いを伺い、その軌跡を紐解く。

「清高ミニタイムス」は2000年に創刊され、今年で25年を迎える。過去の発行

物を取り返ると、創刊当初は「ミニタイムス」ではなく「タイムス」という名称でスタートしたことがわかった。また、各号には局員や顧問の試行錯誤の跡が随所に見られる。

清水印刷(清水町本通4丁目)の二代目・佐藤幸一さん(78)は在学中、「新聞局に頼まれた記事を集めるため、学校中を走り回っていたよ」と懐かしそうに当時を語る。

その後は、家業の印刷業を継ぎ、清水高校新聞の印刷を長年にわたり担当した。「坂根先生(平成12、19年度顧問)の頃は、立派な新聞をたくさん刷ったんだよ。懐かしいなあ」と笑顔で話してくれた。

200号を迎えた今、その積み重ねの重みと、受け継がれてきた清高新聞局の歴史を改めて感じる。

(小川)

彩雲

新聞局長 になりました。た櫻井心樹です。清高新聞は今回で200号を迎えました。これまでの記事一つひとつは、取材に協力してくださった方々や読者の皆さんの支え

によるものです。これからも清水高校の今を丁寧に伝える新聞をつくってきたいと思ひます。(櫻井)

歴代顧問にきく!

全国大会出場も?!

一昨年まで清水高校新聞局顧問をされていた小林先生(帯広柏葉高校)に、清水高校での思い出や新聞局への

思いを伺った。顧問時代の苦労について、「委員会活動だったため、全員で集まる時間を合わせるのが大変だった」と語る。一方で全国大会に出場できたことは大きな思い出で、それをききか

けに「部活のように本気でやりたい」という生徒が増え、三階奥の部室を部室のようにして毎週活動したことが印象に残っているという。「そういう仲間が増えるのが嬉しかった」と笑顔で話してく

また、「ずっと続いているのが本当に嬉しい」「新聞がある学校は少なくなっている。誰かの活躍を記録として残せるのは素晴らしいこと。ぜひ続けてほしい」と温かいエールを送った。最後に「エネルギーギッシュで、自分たちで考えて作っているのが伝わる」と現在の局員の活動を称えてくださった。(横内)

継続は力なり

長年清水高校を見守ってくれている山形先生(上士幌高校)にお話を伺った。「新聞は出し続けることが大事」「新聞を出し続けてくれたことに感謝している」と語ってくれた。ま

た、「今年度発行された先生たちの紹介が載っている裏表の新聞がとても良かった。生徒の工夫や温かさが感じられた」と笑顔で振り話した。

山形先生は平成18年から29年までの11年間、清水高校に勤務し、そのうち10年間新聞局を担当されていた。

「当時は記事づくりが試行錯誤の連続でしたが、生徒たちが一生懸命取り組む姿が今も印象に残っています」と懐かしそうに語る。さらに「原稿が完成したときの達成感に満ちた生徒の表情を見るのが何よりうれしかった。努力の成果が形になる瞬間を見るのは本当に感動的でした」とも話した。

受け継がれる清水魂

平成12年から新聞局を担当された。当時を振り返り、「生徒も先生もわからないことだらけで、当時柏葉高校に勤務されていた田口先生に教わりながら、少しずつ形にしていきました。試行錯誤の連続でしたが、生徒たちの前向きな姿勢に支えられていました」と懐かしそう

に語った。200号の発行については、「ここまで続いてくれている本当にうれしい。伝統を守ってきた証です」と笑顔でコメント。

さらに「清水高校新聞は独創性があり、生徒の個性がいまに表れています。これからも清水高校にしが付けない新聞を作り続けてほしい」と温かいメッセージを寄せてくださった。

私たちも現役の新新聞局員としてその思いを胸に、読者に伝わる言葉を大切にしながら、正確で親しみやすい新聞づくりを目指し、創意工夫を凝らしていきたい。(澤田)



小林先生。左手はピースサインではなく、「200号」の2を表現。笑顔で記念すべき節目を祝った



長年清水高校を見守ってきた山形先生。200号への思いと清水生へのエールを語る



当時の思い出と、生徒たちへの温かいメッセージを語ってくれた坂根先生

最後に「総合学科は学級数が減ると大変だけれど、とてもやりがいのある面白い仕組みの学科。迷わず自分の興味ある系列を選び、仲間とともに将来につなげてほしい」と温かいエールを送っていた。(米森)

読者を惹きつけてほしい」と助言。最後に今後の清水高校への期待を伺うと、「創立90周年を経て先輩方の想いを受け継ぎ、北海道初の総合学科としての伝統を踏まえた校訓のもと、自律・探究・創造を実践し、自ら考え行動し未来を切り拓き力強い魅力ある清水高校であってほしい」と熱く語った。(岩浪)

動き出す勇気を 清水高生への期待

清高ミニタイムスが200号を迎えたことを記念し、校長先生にお話を伺った。校長先生は本校の新聞について「自由なレイアウトで高校生らしく、学校生活の身近な話題を多く取り上げている」と印象を語った。

節目を迎えるにあたり、「昭和や平成の記事を振り返り、当時を今の感性で見つめ直す企画も面白いのでは」と新聞局への期待を寄せた。

また「活字離れが進む中で関心を高める工夫」と、創立90周年を経て先輩方の想いを受け継ぎ、北海道初の総合学科としての伝統を踏まえた校訓のもと、自律・探究・創造を実践し、自ら考え行動し未来を切り拓き力強い魅力ある清水高校であってほしい」と熱く語った。(岩浪)



校訓への思いを語る、増田廣広校長

期待高まる

新たな加わった1年生の中には慣れない業務に戸惑う場面もあったが、先輩の支えを受けたのが前向きに取り組む姿勢が印象的だった。

こうした要望が集まる背景には、生徒会が生徒にとって相談しやすい存在へと変化してきたこともあるだろう。

新体制では、多様な

今後、行事が本格化する時期を迎えるにあたり、先輩と後輩の協力して準備を進める協力には、組織としての成長が期待される。また、新メンバーの柔軟な発想が生徒会全体に良い刺激を与え、活動の幅が広がっている。生徒から「置き勉をできるようにしてほしい」「教室が寒い」（佐々木）意見が共有され、メンバーそれぞれの得意分野を生かした活動が展開されている。学校をより良い場所にしたいという思いを胸に、全員が協力して日々の業務に向き合う姿は頼もしい。今後の行事でも、その団結力と主体性が存分に発揮される。ことが期待される。



(写真上段左から) 書記 米森翔太、会計 三好夏美、
議長 奥田杏、会計 奈良歩真、体育委員長 竹中星夏、
書記 太田凜音、副会長 大谷怜司、保健委員長 岡田咲月、
文化委員長 千野美月、会長 成瀬琳、副会長 鈴木広之



新生寝会長
イソタビ

新生徒会長に就任した成瀬琳さんに、新体制への意気込みを伺った。

成瀬さんは「生徒会長はみんなの声を聞き、それを形にしてい

く存在。だからこそ誰よりも学校のことを考

え、行動する必要がある、前年度よりも責任を感じます」と語った。さらに「学校は友達や先生と関わりながら成長する大切な場所。自分の意見を言いくい雰囲気ではなく、お互いを認め合い文え合える学校にしたい」と力強く話した。

(遠藤)

3Aは一名探偵コナン、3Bは「ジブリ作品」を題材に演技やダンスを披露した。

1年生は初めての学祭に戸惑いながらも、自分の役割を見つけて懸命に行動した。

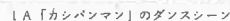
2年生は昨年の経験を生かして準備を効率よく進め、3年生は高い完成度と抜群のチームワークで他学年を圧倒した。

2日目の一般公開では多くの来場者でにぎわい、生徒たちは展示



今年の学
校祭では、
1年A組が、
制作したCMが校内で
話題を集めた。教師や
上級生からの注目も高
く、完成度の高い作品
となったが、結果とし
て表彰には至らなかつ
た。講評では改善点も
指摘され、今後の課題
が明確になった。

初めて学校祭に参加
した1年生にとって、
制作過程や運営上のル
ールなど、学ぶことの
多い経験となった。ま
た、意見の違いがあり



笑顔と感動
2025から2026へ

ながらも、互いに協力し合い、一つの作品を完成させたことが大きな成果となった。

この経験を次年度へつなげ、全校で盛り上がる清高祭をつくっていくことが期待される。(野木)

今年の学校祭は、2年生にとって高校生活最後の大イベントとなった。準備期間中、々々

学校祭は、
 つて高校生活
 イベントとち
 隔期間中、ケ
 ラスの生徒
 たちは企画
 内容につて
 て意見を出
 し合い、時
 には意見が
 ぶつかるこ
 ともあつた
 が、互いに
 話し合い
 がら一つの
 目標に向か
 つて協力し
 た。

本番当日、会場からは生徒や拍手が、響き渡った。発表を見守る中で、生徒たちへこれまでの努力が形になったことを実感し、充実感に包まれた。友人と写真を撮ったり、他のクラスの出し物を見て回ったりするたびに、「これが最後の学



校祭」という特別な時間であることをかみしめる姿が見られた。

学校祭終了後は、各自が協力して片付けを行い、準備期間の互いの努力を語り合う場面もあった。単にイベントの成功を喜ぶだけでなく、三年間の高校生活を振り返り、友人との絆を再確認する機会となった。（保科）



アイドルに扮装した3年生が生徒会企画を盛り上げた

課頭山積

来年の学校祭に向けて、まず体た課題として、まず体育館で行われた生徒会企画の暑さ対策が十分でなかった点が挙げられる。熱中症防止のためにも、換気や冷却グッズの準備などを一層徹底する必要がある。

また、生徒会企画では一部の生徒が盛り上がりにくい場面も見られた。来年度は、全員が楽しめる内容や演出を工夫し、より一体感のある行事にしていきたい。（中村）

體育館前
殺給く音色

本校の体育館前の
曲がり角に、一台の
ピアノが置かれてい
る。玄関にも近く、
く穏やかなメロデー
が心をほぐしてく
ることもあるとい
う。

り、校舎の一角
ピアノという
の図書室だけ
く、校舎の反
ある事務室ま
を伝って響き、事

に静かにたえずむ身
に存在だ。
休み時間や放課後
になると、生徒たち
が自然とその周りに
に耳を傾けている
このピアノは、
い年月の中で数え
れないほどの音色

集まってくる。鍵盤を軽やかにたたく音に誘われて、通りがかった生徒が足を止める。響かせてきた。思出の場所として多くの人に愛されている。

めたり、友人と声を
合わせて歌い出した
りすることもある。
試験前の緊張した空
気の中で、誰かが弾
う。(薄木)



う。
(薄木)